

作業所の利用者は現在五人。お話し

いいですよ。

「私は、障害があるからと何もさせないことが、社会の中に障害者を作り出していくように思います。障害者に対する固定観念みたいなものが根強くあります。それって、彼らを知らないからなんです。それを変えていくのは彼らを知ることです。彼らと地域社会との架け橋になる焼酎になればいいですよ。」



夢しずくの仕込み・芋のカット作業



若潮酒造の千刻蔵での一次仕込み



若潮酒造で箱詰め作業中の夢しずく工房のメンバー



高校生ボランティアと芋植えつぎ

志布志町(現・志布志市)では町営住宅を改修して作業所として提供。焼酎づくりは原料の芋と米の植え付けから手がけ、農家の方が畑や苗を提供、麴用の米は八野小学校の児童と一緒に作った。焼酎造りでは、地元の若潮酒造が、全面的に協力した。手造りのかめ壺仕込、木樽蒸留の「千刻蔵」の一面を提供し、芋切り、麴づくり、一次仕込まで、すべての工程に取り組み夢しずく工房のメンバーに、パート同等の待遇で賃金を支払った。

「私は運営委員長をさせていただいているだけです。その後ろに一人ひとりの農家の方々、若潮酒造、夢しずくの運営委員、志布志の役場の方々ががんばってくださっています。だから、本当の意味で、地域が、志布志が支えている作業所だと思えます。」

「例えば障害者が作ったからという同情票みたいなのは絶対長続きしないと思うんです。つくからには、おいしいものを、本物を。障害者がつくったからではなくて、この焼酎がおいしいから

**本当に
おいしい焼酎だからこそ**

「いろいろなことがありますが、とにかく楽しいんですよ。彼らと一緒に飲むお酒がいちばん楽しいかなと思います。」



伊藤知事へ「夢しずく」を贈呈



多くのボランティアとともに芋掘り大会

飲んでもらえることが大切だと思います。若潮酒造の皆様のご協力、ご支援で、本当にピュアで優しくて透明感のある味の、彼らの思いがこもった焼酎ができたなと思うんです。彼らが一年間一生懸命やってできた焼酎。それがおいしい焼酎になったのだから、すごくうれしい。」

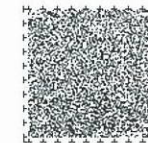
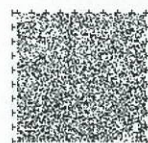
「私は「More Milk・Less Moo.」という言葉が好きで、牛は、そんなにモーモー鳴かずに、草を黙々と食べて、たくさんおいしいお乳を出してくれるじゃないですか。私も周りに感謝して、不平不満は最小限にして、この子たちのためにも、もつともつといい仕事をしたいですね。」

限定販売 かめ壺仕込 本格焼酎 夢しずく

若潮酒造協業組合
〒899-7104 鹿児島市志布志市志布志町安楽215番地
TEL 099(472)1185 FAX 099(472)3800
URL: http://www.wakashio.com/

さつま若潮

検索



ありば ヒューマンドキュメント

悩んで悩んで悩んで、でも、がんばろうと決意

志布志市の知的障害者作業所「しずく夢しずく工房」の最初の焼酎ができたのは二〇〇六年、二年目になる今年は、さらにおいしい焼酎ができたという。「しずく夢しずく工房」運営委員長の西国領俊子さんにお話をうかがった。

「私は歯科医師です。学生時代、脳性マヒの患者さんを診させて頂いたことから、障害を持つ方々の歯科医療に関心をもち、志布志で開業した時、障害者が安心して来院できるように病院にしたいと思

いました。仕事を通して関わっていくとご家族の方から将来の不安についてお話がある。志布志には、授産施設が全くなかったんです。そこで、福岡の知的障害者授産施設JOY倶楽部の理事長である緒方克也先生に相談して、志布志に作業所をつくる資金集めのためにコンサートを企画したりしたんです。そして、先生から障害者の社会参加の手段として鹿児島の特産の焼酎を作るという「志布志夢しずくプロジェクト」を頂きまし

た。今から四年ほど前です。やるのなら、町おこしにもなるように、こ

みんなの夢のしずくが
大きくなって大海になるように。
今年も焼酎「夢しずく」ができました。

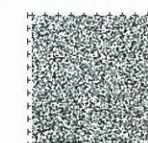
にしこくりょうとしこ [西国領 俊子さん]



焼酎夢しずく 限定1300本
ラベルは福岡JOY倶楽部と夢しずく
工房でデザイン

**人生が明るく
楽しくなりました**

実際にプロジェクトが動き出すと、クリアしなければならぬ「壁」も多く、ピンチの連続だったという。西国領さんの「ピンチはチャンス」と考える前向きな姿勢で、支援の輪も広がっていった。



障害者でなく
スポーツ選手として考える

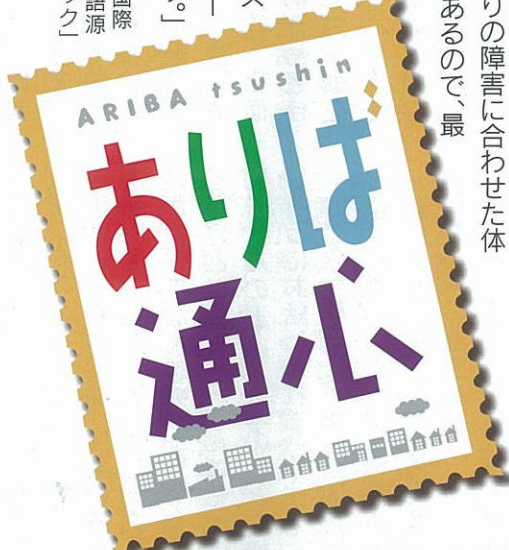
竹内直人さん(28)は二〇〇六年十月から車いすバスケットボールチーム「薩摩ほっけもん」のトレーナーとして、主に選手の身体能力の強化や体調管理をサポートしている。

「学生時代から剣道やバレーボールなどスポーツをしていたのですが、パラリンピック(注1)の車いすバスケの試合を見て、そのスピード感や迫力に圧倒されて。理学療法士として、このスポーツに携わりたいと強く思うようになりました。」

その頃担当患者だったほっけもんの選手の方を通じて、サポートを開始。まず選手一人ひとりの障害の程度と体力を把握し、データをまとめることから始めた。

「選手にけがをさせないことがトレーナーの一番の仕事。そのために、ストレッチや筋肉トレーニングのやり方についてアドバイスしています。病院で行う患者さんのリハビリと違い、スポーツ選手として一人ひとりの障害に合わせた体の使い方を考える必要があるのです。最初はそれが難しかったですね。自分で図書館や研修に向いて勉強することもしばしば。どれだけ選手のパフォーマンスを引きだせるかが、トレーナーとして面白い部分です。」

(注1)四年に一度開催される国際障害者スポーツ大会のこと。語源から「もっぴ」とのオリンピックとも呼ばれている。



医療法人慈圭会 八反丸病院 理学療法士 竹内 直人さん

「自分もチームの仲間も
楽しみながら、
可能性を広げていきたい」



(左上)練習後の肩のストレッチ (上)ほっけもんのチームのメンバーと
(左下)選手に配付した、食事のとりかたや筋肉トレーニングについてまとめた冊子。撮影やイラストから竹内さんと職場の後輩である下久保良一さん、有馬淳二さん、出水孝明さん4人の手作り。

一番楽しいことは
チームが試合に勝つこと

ほっけもんは六月に開催された、第九回九州リーグ戦Eリーグで優勝し、二〇〇七年後期からはDリーグへ昇格を決めた。

チームのキャプテン下堂園清一さん(38)は「彼が来るようになって、選手のけがが少なくなり、チームに活気が出てきました。さらに上のリーグを目指すチームと共に盛り上げていくって欲しい。」と話す。

試合の後などにチームの方々と飲みに行く度に、竹内さんは鹿児島のパリアフリーはまだ遅れているなど感じるという。「車いすを使用している人と一緒に、飲んだり話したりできるお店や環境はまだ少ないですね。」

サポートをしながら「一番楽しいことはチームが試合に勝つこと。選手がけがをすることなく、チームが勝ち進んで行くことが今後の目標だ。」「試合に勝って、皆で喜んでいる瞬間に、サポートしてよかったなあと思います。一人で始めたサポートも、今では職場の後輩三人が自主的に参加してくれていて、内容も充実してきました。これからは最近人気のできた健常者の車いすバスケのチームを作ったり、ほかのスポーツにも携わり、鹿児島島の障害者スポーツをもっと盛り上げていきたいと思っています。」

